

で、ソ連軍の通信傍受について、発信場所、発信状況等についていろいろと聞かれただけで何事もなく、安心して帰った。長かった抑留生活にもこれで終止符を打った。

青春の一時期

岡山県 橋本 修一郎

昭和十八年九月、文科系の学生だった我々には徴兵延期がなくなり、学徒動員で十一月一日、姫路五十四部隊に入隊した。

初年兵を満州佳木斯一二四部隊で終え、新たにできた牡丹江の予備士官学校に十九年五月入隊し、年末まで八カ月の教育を受ける。

ここで、偶然岡山県商（現東高）の同級生草地君に再会する。彼はハルビン学院より学徒動員された。世の中狭いもので、中隊約二百人余の中、見習士官として遼陽の隊付になり、終戦まで二人は一中隊・二中隊

と分かれたものの、同じ部隊で行動を共にした。心強く感じたものだ。

終戦

二十年八月九日、ソ連参戦により駐留していた（承德）より東滿の戦線に参加すべく先行していた本隊を追って、兵約六十名と軍馬約二百頭が貨車で移動を始めた。途中、熱河省葉伯樹（ようはくじ）という駅で列車が止まって動かない。不審に思いながら朝を迎えた。夜が明け近所の民家を見ると、「青大白日旗」が軒並みに掲げられていたのに驚き終戦を知る。八月十六日だった。ここで部下の一軍曹が自決を謀ったが皆で止め、ことを得た。しかし、このときの皆の気持ちは、この軍曹と同じだった。

それと知った現地人の列車の機関手は、いつの間にか逃げていた。八方手を尽くして、やっと捜しだし、錦県へ到着したのは十七、八日ごろだった。当時の錦県の駅構内は無法地帯で、「パン、パン」と小銃・機銃の音が絶え間なく、治安は最低だった。構内で二、三日過ごしたが、その間に軍馬約二百頭の飼育が不可

能となり、放出することとした。現地人に引き渡したのであるが、曳かれていく馬を断腸の思いで見送った。

最前線の本隊を追跡することを諦め、錦県で救援に米ていた北支軍小田部隊と合流し、向陽小学校や飛行場で過ごす。八月末武装解除、以後ソ連軍の管理下に置かれる。九月の終わりともなれば、格納庫のコンクリート上での生活は底冷えし、ソ連の悪給与と過酷な労働とで体力の消耗は甚だしくなる。

「東京ダモイ」(帰国) だと言うカンボーイ(ソ連の監視兵)にだまされ、十月七日貨車に乗せられ約七十日間にわたる貨車輸送が始まった。二段に仕切った貨車(三十トン)の二画は約三坪くらいか、その一角に約十五、六人が起居した。狭いので夜使所へ行くと寝る所がなくなる。止むなく、人と人との間に横たわると、自然に下にさがり落ち着くという始末だ。便所も貨車の中央に穴をあけ、人前なんか気にせず用を足したものだ。入浴などもろろなく、時に水で体を拭くくらいだから「シラミ」がわき、日中は「シラミ」退治に熱中した。

関東軍六十万人の輸送だから当然と言えば当然かもしれないが、貨車は一日走っては一日止まり、五時間走っては八時間止まるといった状態が続いた。「東京ダモイ」の噂にだまされて、逃亡する者も出た。マンドリンによる威嚇射撃で負傷したり、中には射殺された者もいたようだ。

「黒河」から「ブラゴエシチンスク」へ

十一月下旬の北滿は零下十度を超すだろう。戦闘で焼かれた廃屋に野営しながら、結氷した「黒龍江」を一日二、三回即製の「ソリ」に荷物を満載し、三、四人の兵で引き、渡河した。荷物はソ連が日本人より奪った物資である。

川幅三キロメートルくらいあった。朝九時ごろ夜が明け、夕四時ごろには暮れる。食糧はメリケン粉を固めた煎餅状のものが一日二、三枚で、皆寒さと空腹で疲労著しいが、カンボーイの「ダワイ、ダワイ」(急げ、急げ)と言う掛け声とマンドリンの威嚇に牛のごとくに働かされる。ある兵は、気力が無くなり全く歩かなくなった。全身の血流が遅滞し、放って置くと凍

固する。一晩中、分隊全員交代で裸の体を乾布摩擦し、蘇生させ一同ホッとした。

この渡河作業の終了が満州からソ連領への第一歩だった。我々のソ連での抑留生活は、ブラゴエシチェンスクから始まった。

シベリア鉄道

ある日、大きな海らしい所を列車が通った。方向感覚を失っていたのだろう。「おお日本海にきた。日本に帰れる」と小躍りしたのもつかの間、「バイカル湖」と分り皆がっかりした。

シベリアの寒さは北満の寒さより格段の違いだ。十二月十四日ケメロボに着く。駅からラーゲル(収容所)までは約三キロ、気温は零下三〇度くらいか、本格的な抑留生活の始まりである。

ラーゲルに向かうとき、ある兵は責任感の強い人で、雪中荷車に荷物をいっぱい積み、約一時間の間に一人で猿棒を握り行軍した。結果、両手指が凍傷になり、手当の甲斐なく、両手親指以外切断したことは痛ましい限りであった。

作業内容

最初の一年間は、火力発電所の石炭の荷降ろしだ。後に八時間三交代になったが、当初は十二時間交代だった。シベリアの冬は長い。十一月ごろから五月ごろまでは全く寒い。冬の作業は、塊炭やさらさらした石炭は良いが、湿気を含んだ微粉炭は凍っていて、岩を砕くように硬い。

「ダワイ、ダワイ」とマンドリンの威嚇に耐えながらの作業、一日三百グラムの黒パンと薄い粟のスープでの栄養失調状態での労働は思い出したくないが、今でもゾーッとする。朝起床してみると下の寝台で仲間が栄養失調のため死んでいたこともあった。

二年目は、発電所から出る炭殻にセメントを混ぜて煉瓦(今のブロックのようなもの)を造る作業だ。原始的な器具で、ノルマに追われたものだ。しかし、ここは、屋内作業が多かったので助かった。

三年目は、隣の街レニンスクズネッキーに移動、炭鉱作業だったが、屋外が多かったが、三年目ともなれば要領もよくなる。ロシア語も通訳なしで話せる。

ここでは政治教育が盛んで、日本人のアクチブ（活動家）が威張っていて、同胞同士のいがみ合いに精神的に疲れた。

ラーゲルの生活

ラーゲルはソ連の囚人を収容した所らしく、木造で約二十坪くらい、その中に約百人押し込まれる。暗い電灯とベチカはあるが燃料不足。舞鶴の引揚記念館に再現してあるが、二段木造ベッドに、列車と同じように、一坪くらいに四、五人寝るので狭いことこの上なし。ここでも「シラミ」の攻撃と、夏はシベリア特有の大きな南京虫に悩まされる。

楽しみは正月、五月メーデー、十月革命記念日に、少ないながら米飯が支給され休日となったことだ。多くの兵隊の中には、大工、印刷屋などいろいろな職業人がおり、白樺で麻雀牌を作ってくれ、たまの休みに明くる日の黒パンを賭けて楽しんだこともあった。

後で分かったことだが、昭和二十一年ころ、収容所長「ユーモフ中尉」が我々の食糧をごまかし、約半月間ポーミ（とうもろこし）と塩のみで過ごしたことが

あった。大部分の者は下痢に悩まされ、死亡した者もあったことは忘れられない。

「シラミ」退治には弱った。一カ月一回くらいの入浴は、一、二杯の湯で体を拭くのみだ。年に一、二回陰毛を剃り毛ジラミを防いだ。頭髮も剃ったが、この場合バリカンが切れなくて……。

入浴中は衣類を蒸気消毒した。数日間「シラミ」の攻撃をまぬがれた。

帰国

待ちに待った帰国の知らせが二十三年十一月末ころあった。これも尻をつまんで見て体力の弱った者から順に帰らせた。ナホトカで日章旗を掲げた「永徳丸」を見たときは、思わず感泣した。昭和二十三年十二月三日、小庭のような緑濃い舞鶴湾に入港した感激は、一生忘れることはできない。

あとがき

自分にとって、この軍隊の二年とシベリアの三年間は、何物にもかえがたい貴重な経験だった。

七十年余りを生きてみて、一生にはいろいろの事が

ある。何事も紙一重で幸、不幸は隣合わせだ。自分の原隊は、前にも述べたが、満州佳木斯一二四部隊で、フィリピンで全滅している。自分は予備士官学校で教育中のため助かった。また、運の強い戦友は、終戦直前の二十年春、本土防衛軍に転属になり本土の土を踏み、内地で終戦を迎えた者もいた。だが、当初千三百人だった隊員のうち、生きていた者は、転属者たちを含めても、百八人とわずか九パーセントの生存率だった。

残り少ない人生は、戦友の冥福を祈り大切に生きていきたい。

忘れられない抑留生活

岡山県 三宅 正人

一 出生から入隊

1 岡山県井原市東江原町二六九五番地

明治四十五年二月二十八日生

昭和五年三月 矢掛中学校五年卒業

2 不況時にて就職場所なく擦糸工場を始める。父母弟妹五人暮らし。

二 ソ連軍侵攻前

1 満州国新京市厚生会本部勤務中、二十年五月十七日、現地召集で白城子北方のソ連国境近くへ入隊、銃帯及び軍服等支給される。

2 七月ころ、旅順へ引揚げ奉天都市防衛に当たる。

三 ソ連軍侵攻

参戦の報に接し、奉天市街の道路を掘り戦車溝を作る。

四 終戦

1 八月十五日、東北大学講堂に集合、詔勅を聞く。ラジオの雑音多く聴き取れず。戦争に負けたのだと後から聞かされ皆一度にがっかり。

2 数日後ソ連軍進攻、武装解除される。部隊編成は北支より病人部隊として奉天移動してきた部隊と一緒でした。

3 ソ連の命により奉天郊外の満人部落へ移動し、し